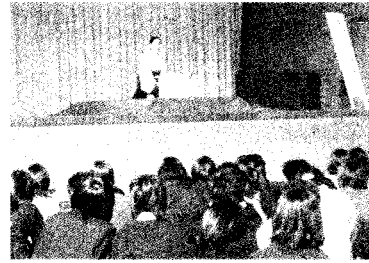


「教育現場に福祉の風を」 七里ヶ浜のコジケイとトンビ

横浜支部長 須田 幸隆



の命題について、今だに悩み続け、答えを模索している『泣かず飛ばす』の状態です。これから社会へと羽ばたく学生さん

平成19年5月15日(火)、神奈川県立七里ヶ浜高校で700名の高校生に、福祉入門講談を聞いていただきました。成年後見講談と同様に、講談師の神田織音さんと私たちとのタイアップで実現したものです。さわやかなその日、前にきらきら輝く鎌倉の海、後ろに新緑の鎌倉の山、加えて「ちょこほい、ちょこほい」とコジケイに迎えてもらって校門をくぐりました。会場は高校の体育館です。私たちが会場設営のために中に入ると、生徒が体育の授業中でした。織音さんが、「テスト、テスト、マイクのテスト中」「授業中の皆さんご迷惑をお掛けします」と呼び掛けると、すかさず生徒から拍手が起きました。

さて、最初は新作講談「風切羽」です。ここからは横浜支部の村内麻里奈さんの感想を紹介します。「聞き終わった後の印象を一言で言えば、まるで青春ドラマを見たような心温まるものでした。ストーリーは内容深く、友情や家族愛、そして『われわれはいかに生きるべきか?』と言う、いわば人生の命題を問うものでした。私自身もまた、こ

うだけでなく、『人としてのありよう』を考えさせられる講談でした。」
続いては、福祉入門編です。
主人公は高校卒業後、ミュージシャンを目指しますが、これまた「泣かず飛ばす」です。親からは、ニート、フリーターの状態を強くなじられます。働く決意をして、何度も正規雇用職に挑戦しますが失敗します。それが理由で失恋もします。失意のどん底に落ちます。そんな中行った特別養護老人ホームでの音楽ライブが、主人公を生き返らせるきっかけになります。生き生きと働く介護職員にも出会います。こうして主人公は、仕事として福祉施設で働き、音楽活動も続けていく道を模索します。ストーリーはこんな具合ですが、両親との会話に、高齢社会・

突撃取材



広報委員 小泉八重子

ワーキングプア・社会保険などの話しを織り込んでいます。
聞き終わって、二つの話しは繋がっていることに気付きました。若者が夢を追い、生き方を模索し、現実とのギャップに揺れ動くのです。織音さんは、「若い頃の自分とも重なり合って、今日は本当にドキドキしました」と打ち明けていました。
生徒の「ありがとうございます」との声に送られて校門を後にしました。終了してほっとした気持ちもあつてか、空高く声高に「ピー、ヒヨロツロ」と鳴いた七里ヶ浜のトンビの大きくなってカッコいい姿に、妙に感動しました。



「福祉士かながわ」5月号を発送してほっとしていた頃、同じ広報委員の溝田さんから、須田幸隆さんより取材においでくださいと声を掛けていただいたので広報委員のどなたか行かれませんか?とメールが入りました。
取材は「神田織音さんが七里ヶ浜高等学校で、「福祉入門」の講談：これは面白そう。すぐさま取材の依頼をし、須田さんのご配慮で、スタ